

◎今週の御言葉 「野の花、空の鳥」(ルカの福音書12章22節～34節) 「何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい」(12:31) 仲森文穩

○「いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい」と、イエス様は仰います。そして喩えに用いられるのが、カラスであり野の花です。カラスは凶暴ですが、親子の情は深いようです。昔、木から落ちてきた子ガラスを外で飼ったところ、親ガラスが毎日きて、「返せ、返せ」と口ばしで木の枝を突つき、恐ろしい程でした。また鳩にエサをやっていたら、カラスが飛んできたので、パンくずを投げてやると、口ばしで10ヶくらい上手に咥えて巣に持ち帰るのでした。神戸の教会にいた頃、教会前の喫茶店のオウムが日本語ペラペラで、オハヨウなど挨拶は勿論、走っている人を見ると「ファイト、ファイト」と声をかける。自分のまねをしてはばたく人を見ると「アホー」と叫ぶ。実に賢いオウムです。しかし、その鳥たちがうらやむくらい、神様の愛は私たち一人一人に豊かに注がれています。

○「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。だけど栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった」とイエス様は仰います。ソロモン王は巨万の富を築き、豪華な服を着ていたと思われます。しかし、この野の花一輪の装いは、あのソロモンも及ばない、と言うのです。実に痛快です。しかし、花の命ははかないのも事実です。でもそんな野の草でさえ、神様は美しく装っておられる。「ましてあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう」。実にイエス様のお言葉は感動的です。

○鈍い感性の私でも、花を見て神様の愛を感じる時があります。例えば、礼拝堂の生花です。この花は自然に存在するのでなく、活ける人がおられるのです。講壇の花には、この花を見て慰められるように、との活ける人の祈りがあります。世の中で気づきにくいのが神様の愛、そして人の小さな愛です。イエス様は、空の鳥にも野の花にも、神様の愛をご覧になります。カラスが白鳥を見て、自分も白くなりたいと思い、体を洗い続ける童話がありますが、人間の作り話です。実際には、彼らは背伸びもせず、卑屈にもならず、ありのままの装いで生きています。人間だけが、背伸びしたり卑屈になったりして、ありのままの姿を感謝できないでいます。人はあれもこれもと思い悩んで悩みを丸抱えしますが、どんなタフな人でもつぶれます。「気をもむことをやめなさい。あなたがたの父は、それがあなたがたにも必要であることを知っておられます。何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい」と、イエス様は仰います。自分の力で何とかしようと思い悩むのではなく、神の国(神様のご支配)を求めなさい。神様の御守りにあなた自身をゆだねなさい、とイエス様は教えておられます。